

◇ 同好会 「歴史を歩く」～渋沢栄一翁 関係史跡 巡り～ 快晴 参加者 18名

今回は、皆さんのお財布の中に3年後に入る1万円札の新たな顔に選ばれた渋沢栄一を訪ねる旅です。



記念館で講義を受けました。

18名の参加者は、池袋から湘南新宿ライン、高崎線で深谷まで1時間半。深谷駅に降り立ち駅舎を見上げると、その迫力に圧倒。東京駅を模したレンガ風のレトロな外観。曇1つない青空に優美な佇まいが映えます。路線バスが走っていないため、「歴史を歩く」では初めての試みとして、現地でバスをチャーターしてゆかりの地を巡ることに。

まずは腹ごしらえ。「麵屋忠兵衛煮ぼうとう店」で名物の煮ぼうとう（山梨は味噌味、深谷は醤油味）とトロロご飯セットを食べました。栄一翁も帰郷した時は必ず召し上がっていたそうです。古民家でいただく郷土料理はまた格別。

◆旧渋沢邸「中の家（なかんち）」

日本資本主義の父と言われ、生涯で銀行、製造業、鉄道、ホテルなど500もの株式会社を設立し、日本の経済に多大な貢献をした渋沢栄一の生地。1840年ここで生まれ、青春時代を過ごした家。藍玉の製造販売と養蚕を兼営していた富農でした。主屋は屋根に煙出しの天窓がある典型的な養蚕農家の形を残しています。

◆鹿島神社

栄一らにより建てられた、尾高惇忠の功績を称える大きな石碑があり、題字は徳川慶喜によるもの。この境内で、栄一の母えいはハンセン病患者の世話をしていたと伝えられ、栄一が終生慈善事業に貢献したのも、母譲りの慈悲の心によるものと言われています。

◆渋沢栄一記念館

栄一の貴重な資料を展示。赤城山を望む場所には大きな渋沢栄一の像が立っていました。講義室では、70代の栄一の風貌を忠実に再現した「渋沢栄一アンドロイド」が、自分の考えを全体を見回したり、時には手を挙げながら話してくれました。在りし日の渋沢栄一翁を彷彿させてくれる1コマでした。

◆尾高惇忠

尾高惇忠は栄一の従兄にあたり、栄一は少年時代から論語をはじめ多くの学問を学び、栄一の人生に影響を与えました。明治維新後、富岡製糸場の初代工場長を務めました。生家は江戸後期に建てられた、この地方の商家建物の趣を残しています。

◆深谷大河ドラマ館

大河ドラマ「青天を衝け」の撮影で使用した小道具や衣装を展示。セットの1部が再現されていて、大河ドラマの世界観を体感できました。

4時頃興味深いゆかりの地巡りは終わりました。お疲れ様でした。渋沢栄一翁は幕末から昭和初年まで、凄まじい社会の変化の中で、七転八倒しながら変わることを恐れず、世界の動きをいち早く読み取り日本を導いて、1931年91歳でその生涯を閉じました。実業界に止まらず、生涯を通じて社会福祉事業にも尽力しました。

「コロナの居ぬ間に、心の洗濯」？できましたでしょうか。ご参加ありがとうございました。

< 報告：関根悦子 >



深谷駅前での記念写真